土田耕平著

アララギ叢書第十三編

歌集

青杉

東京

古今書院發行

歌集

青杉

土田耕平著

古今書院

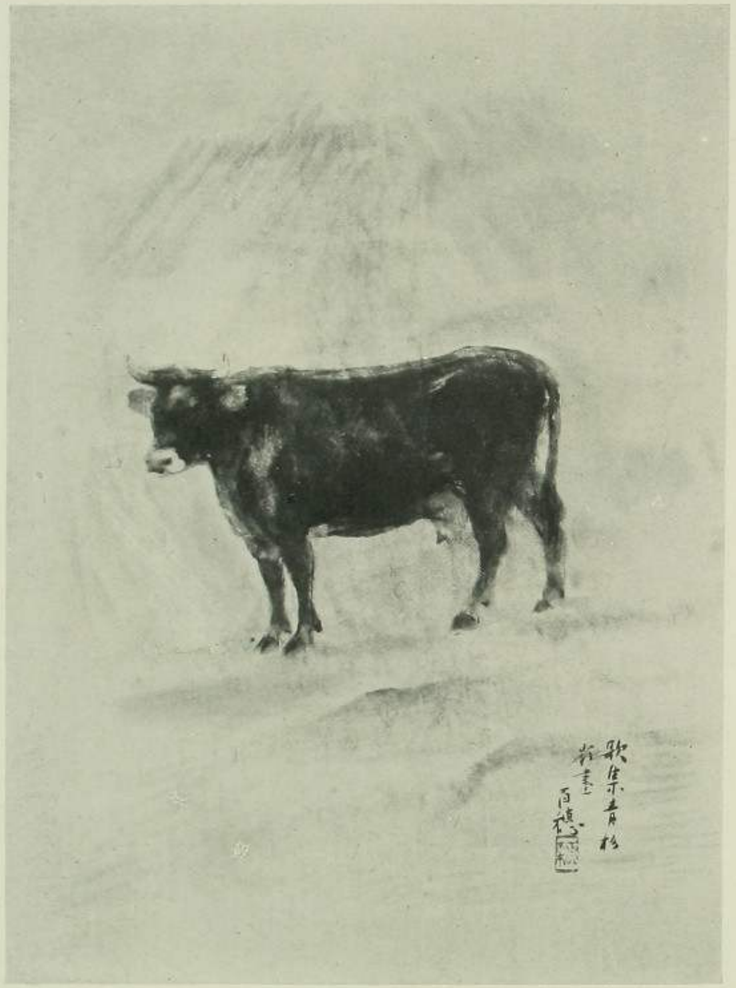
土田耕平著

平福百穂口繪及裝幀
（アララギ叢書第十三編）

歌集

青杉

東京　古今書院發行



伊豆大島にて詠める

櫻葉の散る日となればさわやかに海の向山
見えわたるなり

岡のべの草に秀づる芒の穂やや秋あらし吹
き出でにけり

一面の陸稻畑は色づけり日影あかゝく萱の
穂そよぐ

日にけに野分つのりて空明し三原の煙立た
ずなりしか

吹きとよむ野分榛原ひよどりの飛びたつ聲
はなほ悲しけれ

芋の葉の破れ葉大きく搖らぎ居り野分の空
はただに明るし

裏戸出でてもとほり聞けば虫繁し納屋の中
にも一つ鳴きたり

こほろぎの鳴く聲とみにひそまりて庭の茂
みに雨か降るらし

さむざむと暮れて來にけりわが宿の垣根に
そそぐ秋雨の音

草まくら時雨ぞ寒きわが友のなさけの羽織
いただきて着む

しめじめと堀割道の櫻落葉朽ちたまりたり
牛の足跡

夕渚人こそ見えね間遠くの岩にほのかに寄
する白波

日の下になびく萱の穂つばらかにわが故里
の丘おもひ出づ

かぎりなく潮騒とよむ冬の日の砂山かげを
歩みつつ居り

砂山に夕日かげればしみじみと潮風吹き來
海の方より

夕早く潮滿ちぬらし磯かげの泊り小舟に灯
がともりたり

ゆふぐれて時雨のあめの降るなべに室ぬち
寒し獨りもの食ふ

榛原に鴉群れ啼く朝曇り故里さむくなりに
けむかも

あかあかと圍爐裡火燃ゆれこもり居の今日
も日暮れて凩の音

海越えて富士の山嶺に雪白し木々の葉散ら
す雨晴れゆけば

冬枯の野面はだらに日影さしたまさかに飛
ぶ鵶鳥のこゑ

木枯の風吹きすさぶ夕なり机の上に洋燈(らんぷ)を
ともす

こがらしの風静まれば大海の濃青(あを)の搖らぎ
ただ寂しかり

目にとめて信濃とおもふ山遠し雪か積れる
幽けき光

十二月十七日

草まくら旅にしあれば母の日を火鉢ながら
に香たきて居り

潮音(しほおと)のとよむを聞けばおぼつかな島べの春
となりにけらしも

こぞの春とめ來し森の下萠にふたたび來つ
つ心さびしも

牛通ふ堀割道の夕かげに山ざくら白く散り
たまりたり

さくら散る山裾道の夕ぐれを牛曳きて來る
少女子あはれ

おしなべて光る若葉となりにけり島山かげ
に居啼く鶯

渚原かぎろひ高し見はるかす海のおもての
春日かがよふ

住みなれて心寂しも磯木立青葉する頃はわ
れ痩せにけり

青葉山島山さやに啼く鳥の聲のさかりは今
か過ぎなむ

山の根におのづからなる靄の凝りあはれと
思ふ春は暮れにし

春深き曇りとなりぬ今日一日長根の濱の波
音きこゆ

磯こえて野の増の村の夕けぶり低くしなびく
雨となるらし

さみだれの雨間乏しみ出で來れば袂にさわ
る草伸びにけり

梅雨ふけの草にうつろふ日の光虫ややに鳴
く聲ぞ聞ゆる

しめじめと梅雨のなごりの風吹けり片山道
に搖るる紫陽花

深青葉雨をふくめる下かげにひとむら白し
あぢさゐの花

雨ながら今日も暮れたりわが宿の裏道通ふ
牛の足音

つくづくと爐ばたに坐る朝ひとり膝のよご
れに心とまりぬ

蛙鳴かぬ島にし住めばこの頃のそぼ降る雨
夜ふるさとを思ふ

月今宵まどかに照れり旅の身のけながくし
あれば泪わくらむ

たそがれて久しとおもふ砂の上に日のほと
ぼりのなほ殘りたる

わが植ゑし庭の草花咲き出でて朝な夕なの
眺めうれしも

宵々に木の間洩れ來る隣屋の灯影も馴れて
夏ふけにけり

行きかひの雲脚早き九月空をりをりにして
雨を落しつ

殘暑なほ單衣(ひとへ)の肌に汗ばめど磯の木蔭に鳴
く蟬もなし

この山は皆水木なり竝みそろふ幹のすぐ立
眼にこころよき

三原山湯場

たまさかに木立の上をかすめ飛ぶ煙は白し
天雲に似つ

同じく

山は暮れて海のおもてに暫らくのうす明り
あり遠き蜩

同じく

慌しく蜩鳴けり目のもとに暮れ沈みゆく山
の谷あひ

山岨にわづかに殘る夕明りさくらの紅葉色
映えて見ゆ

たちこむる山のさ霧は深くして杉のしづく
のしとしとに落つ

霧深き山の道べに逢見たる炭焼の子のみめ
よきかなし

山かげのものしづけさや今日すでに蟬聲絶
えしことに氣付けり

小園

秋しぐれ降りての後に咲きつぐやダアリヤ
の花小さかりけり

今われは人おもひ居つ飯鍋の泡ふく音におどろきにけり

さびしさをいづべにやらむ夕波の五百重の冲に沈む伊豆山

熱ややに高きにたへて夕ひとり飯食む心かなしかりけり

ひややかに洋燈のもとの藥瓶にすいと虫なく夜ふけにけり

あらし過ぎて日はあたりたり地響の大きく
するは磯波の音

雨晴れの土に沁み入る日の光うつらかに聞
くこほろぎの聲

空高く月は晴れたり荒あとの寂しき土に人
の聲すも

さながらにあらしの後の島原を月影さやに
照しつるかも

落ちしきる木の葉のにほひいたいたしきぞの嵐に揉まれたるなり

女らにおくれてかへる畠道萱の穂白く夕さりにけり

三原山上

やや暫し雲影落ちて暗くなる火口の原を飛ぶ鴉あり

同じく

冬の日の低くし照れる焼原にやや砂けぶり吹き立ちにけり

三原山上

かそけくも落葉吹きまろぶ音すなり燒砂原
の一すみにして

同じく

燒原のむかうに青く島裏の海見えわたる心
こほしく

同じく

耳とめてわれ聞きにけり遙かなる山下磯に
寄する波音

同じく

久方の天のそぎへに眞壁なす信濃の嶺ろは
雪かづきたり

草の戸に時雨るる日なりききとして百舌鳥
啼きすぐる聲の悲しさ

寂しさに耐へてもの焚く日ぐれ時板戸の外
にしぐるる音す

仰ぎ見る空の色さへ澄みはてて木枯の風吹
きにけるかも

凩の日にけに吹きて山肌は赭くさびしくな
りにけるかも

木枯の吹く音寂し夜ごもりに火鉢ひとつを
かい抱き居り

木枯の風吹きすさぶ夜更けて月の光は照り
わたりたり

乳ケ崎の冲べ流るる早潮のたぎちもしるく
冬さりにけり

國山は雪降りつもるしかすがに島の椿は今
さかりなり

冬深き日和となりぬ磯に來て一日したしむ
青海の色

そこはかともの戀しさに出で歩む夕ひととき潮鳴の音

この岡の日向ぼこりに來慣れつつ冬暖かきことをうれしむ

目をとぢて暫らくむなし天つ日はわが額(ぬか)のへに沁みわたるなり

眺望

うちわたす木末に低き山かげは海のかなたの相模なるべし

述懷

父母をならび思へばとく逝きし父の面影はうすきが如し

あからひく日の入り方の潮曇り千重に百重に朱流れたり

暮れ暮れの赤き日包む潮曇りはるけき國を偲ばせにけり

咲きそめて幾日も經ぬに丹椿(につばき)の花は木下に
散りしきて見ゆ

雲晴れて見れば寂しき山の峯ほのぼのとし
て雪降りにけり

焚きすてし落葉の煙あはあはと杉の木枝に
まづはりにけり

暖かき日影をとめて來りつる枯生のもとに
菫咲くはや

春さらば菫を摘みておくらむと思ひしもの
を人はむなしき

春の日はうなじに暑しとぼとぼに山原道を
歩みつづくる

春雨の晴れゆく方の沖つ空はつかに光る富
士の雪かも

伊豆山は霞みつつありうちわたす青海原の
うねりゆたかに

との曇り暮れゆく沖にいさり火の影かと見
しは伊豆焼くるなり

きのふの雨にしめれる木の間道若葉うつく
しく照り映えにけり

隣人の死

咳き入りし聲もとだえぬ行く春の垣しもと
葉を隔てつるかも

灯をさげて磯のほとりに來りけり夜潮のに
ほひしみじみとする

澄む月をそがひにしつつ立ち戻る渚の砂に
ひとつわが影

松蟬の聲しきりなり、吹きわたる青葉の風を
すがしと思ふ

病友と共に臥す

寢入りたる姿を見ればおのづから病み細り
けむその頂(うなじ)あはれ

枕べのあま戸に早くあかつきの影さしそめ
ぬ眠られぬ夜は

日の暮の海のおもては靜けくてわが目にか
かる舟一つあり

木下道すでにかげりて蜩の聲あわただし獨
り歩むに

磯波の音もとだえし夜のしづみ洋燈の笠に
とまる虫あり

ひやびやと夜ふけにけりわが宿の障子に居
鳴くはたをりの聲

長根

わが行手鴉群れつつ荒磯の岩黑き上にあるひは飛べり

磯の上の松山こえてなびかふは廣布燒く火の煙なるらし

見渡しの海のかなたはかきくれて雨か降るらし相模嶺のあたり

夕凪ぎて一平らなる海の上に歸り帆のかげつぎつぎと見ゆ

目にとめて磯のかたへの流木に烏糞白し海
曇る日を

月きよき夜頃となりぬわが宿の芋畑に來て
唄うたふ子ら

今日一日こもり暮しぬ外の面ゆく人のあお
とも戀しかりけり

面伏せに歩みつつ見る足袋の穴わが下心つ
つましくあり

朝戸出のわが眼に見えて富士の山白雪照れり海のかなたに

伊豆の岬雲ふくらめりしかすがに冬の日脚の早く傾く

室深く日影さし入るうれしさよ殘りの蠅が群なして飛ぶ

三原山裾の榛原うら枯れて鵯鳥のこゑを聞くべくなりぬ

一色に冬枯れにけりこの山の若葉せし日に
來しを思へば

こほろぎの聲もとだえしこの夜頃時計のき
ざみ心にし沁む

湯あがりの肌あたたかし家の間の草枯道を
のどに歩み來

天つ星滿ちかがやけり夜ふけて海よりあぐ
る風の冷たさ

かりそめの風邪長びきぬ冬の雨今日しとし
と降り出でにけり

枕べの障子にひびく波の音おもへば遠き旅
の宿なり

きぞの夜は雨さむかりき吹く風の今日はた
激し障子戸を揺る

しぐれ來る音まばらなり目をとぢてすなは
ち憶ふ故里の山

病みあとの弱りを持ちて家ごもる今日も日暮れて寂しかりけり

冬枯の山の木原をとよもしてただ吹きわたる風のさびしさ

寢ねぎはにふたたび見むとおもひたるみ空の月は雲がくれにし

歲暮の感

この宿にかくて三度の年暮れぬ机の上の御ほとけの像

踊り場の若衆ら見にと去年は行きし今年は
行かず家に寢て居り

其二

踊り場の太鼓にぎはし晴衣(はれぎぬ)の村少女ともき
そひ行くらし

其三

わが心何かしきりに哀しくて晝床のへに目
をつぶり居り

其四

寢てきけば笛や太鼓の音すなりわが父母の
國し戀しも

めづらしく降れる雪かも日の照りの眩しき
家に一日こもりつ

雪のあと暖かくして夜もすがら屋根の雫の
落つる音すも

杉の穂の高きを見れば月澄める空をわたり
てゆく風のあり

山の樹はいまだ芽ぐまずおし照れる今宵の
月夜寒けかりけり

春いまだ淺しとおもふ山の原月照りわたり
ものの香もなし

み空ゆく月の光は澄みながら山原低く霧ら
ひたるかも

にはたづみ溢るる見ればこの朝の雨暖かく
なりにけるかも

みんなみの弘法濱にいくそ度潮鳴たちて春
は來ぬらし

日がさせば野べの落葉も乾きつつ蜥蜴さ走る音のかすけさ

榛の木の花は咲けれど春いまだ寒しと思ふ土の日あたり

山の雲うごくを見れば春早くみんなみの風吹き來るらし

海原を吹き來る風は暖かしたちまちにして木の芽ひらくも

東の間に冬をすごして島原や榛の木立は芽ふきそろひつ

亡友の「跡

足あとも殘りてあらむこのあたり土にあまねく草はびこりぬ

病みあとの足力なく歩み來て野べの若草に心したしむ

山原や杉の若蒲黄にほけて日射しほとぼる夏となりけり

一面の穂麥畠にあかあかと風波わたる見れど飽かなく

虫の聲まだいとけなし梅雨晴れの今宵月かげ草を照せり

降る雨に濡れつつ咲けるすひかづら黄色乏しくうつろひにけり

故里は苗代小田に蛙鳴く頃とおもふに今日も降る雨

ものうき梅雨にこもりて幾日經し今朝はか
らずも百合をもらひぬ

おもおもと梅雨のなごりの風吹けり夜目に
は凄き蜀黍の畑

日ならべて風みなみ吹く梅雨のあけ蜀黍の
葉はいたくそよぎつ

障子あけて風まともなる涼しさよ遠くまた
近く松蟬の聲

天雲はいまだも深し梅雨晴れの光ひとときの
海を照せり

雨あらく庭の草葉に降りそそぎ降りそそぎ
つつ今日の日暮れぬ

月させば大きく光る芋の葉に馬追一つ鳴き
いでにけり

月影は疊の上に照りにけり足さしのべて獨
り安けさ

虫の聲一夜々々と繁くなれり人もとひ來ぬ
草のとぼそに

生けるものつひに儚なくなりぬべし月夜も
すがら蟀の聲

ほそぼそと命たもてり藪かげの家居日暮れ
て蚊の聲ぞする

遠空に稻妻あれやわが立てる磯の平は暮れ
わたりたり

素足もて歩むによろし濱いさごひやひやと
して宵濕りせり

渚道行くさきざきの草むらにかぼそくこも
る虫の聲はも

歸り來てひとりし悲し灯のもとに着物をと
けば砂こぼれけり

夜に入りて野分つのれり搖れとよむ木立の
上に高く澄む月

しづかなる夜とおもふに三原嶺の煙は高し
月に映えつつ

南向くこの一間こそ嬉しけれ冬の日かげの
一ぱいにさす

間歩に

うら枯の林をこえて見ゆる海ここらあたり
の眺めは廣し

日和風吹きのまにまに照り光る椿の木竝う
つくしきかも

淺山のこの山かげに散りしける諸葉の色の
けぢめまだあり

落葉する島の木原はしづけくて艦(ふね)の砲音遠
くより聞ゆ

手をひたす岩間の潮はあたたかし何か藻草
のなびきつつ見ゆ

家垣に目白寄り來るあさゆふべ呉竹の葉は
散りそめにけり

大正九年三月上京、麹町の宿に久保田先生及び藤澤實氏と會す

われひとり離れ住む日の長かりし面あはせつつ沁々おもふ

其二

雨さむみ置炬燵してこもり居りうす茶の碗をいただく我は

其三

室ぬちに煙草のにほひこもりたり雨ふる音はしづかに聞ゆ

其四

この宿に置炬燵して一日居りまた島住みの身にかへるべし

其五

青き海おほにめぐらして眞木茂れる島住み
の幸を今し思ふも

いつしかも櫻の花は散りすぎて蕚(うてな)こまかく
色立ちにけり

木がくれに小鳥啼きやむ長き日を麥の穗は
ら染め出づるなり

森かげの道はをぐらし白々といぼたの花の
散りしけるらし

仰ぎ見る月のおもてをやや暫し夜雲のちぎれ移ろひにけり

軒近くほととぎす啼く聲に馴れてこの梅雨頃をこもり暮しぬ

さみだれの木下の雫ひやびやし今宵はすでに更けにけるかも

梅雨こめて目見に重たき青葉山ほととぎす啼く聲ぞ聞ゆる

つゆ時の何か含めるさび持ちてほととぎす
啼く森のおくがに

ひとたまり磯波落ちてひろがれば白泡立ち
の限り知られず

林間にて

まがなしきものをぞ見つる繁山のこの山か
げに人ふたり居し

其二

小鳥二つ逢ひつつ啼けりわがかつて知らぬ
さきはひをそこに見にけり

濱にて

目見(まみ)あげて山のすがたに向ふ時潮(うしほ)の音はわづらはしけれ

差木地村

外海のながめ果てなしとぼとぼに笹屋根並ぶ島の端かも

迫り立つ岩肌は赭し見る見るに波のうねりに浸されにけり

ひたひたに潮湛へたりさし透る光に見えて深き底岩

三原山上

霧晴れて眼おどろく青海の色かと見しは大き海原

同じく

見めぐらす新島利島伊豆相模安房の岬はいや遙かなり

哀しみ歌

きのふまで常にわが見しうつくしき黒髪の子はいづち去りけむ

同じく

菜摘み籠腰にさげもて行きし子をすこやかなりと我思ひにし

述懷

うつせみの命短かし夜ふけて杜の小蟬の幾度か鳴く

墓前

露そぼつ朝の御墓に燃えさしの香かすかなり誰が參りけむ

同じく

墓のべに心あやしく立ち添ひぬ少女のすがた保てりや否

同じく

もみぢ葉のすぎにし子らが墓どころ心にしめて佇む我は

寄る波の八重しくしくにうち白む沖つ島根
の曇りさびしも

目にたちて木草の緑ふけにけり今日初あら
しとよもして吹く

蟬の聲にはかに乏しこの朝のあらしになび
く青笹の群

夏すぎて心さびしも庭のへに稀に寒蟬鳴く
ばかりなり

秋の日となりしこの頃寒蟬の鳴く聲きくも
いつまでならむ

ややにしてまた鳴きぞめつ寒蟬のただ一つ
なる利聲さびしさ

寒蟬は長くは鳴かず眞日なかにただひとき
はの聲透るなり

出でて見る今宵月あり遙かなる海のおもて
は照り白みつつ

ひややかに月夜ふけたりわが庭の草村に鳴く虫聲いくつ

仰ぎ見る夜空しづけししみじみと月の面より光流れ來

ぬば玉の夜は更けぬらし庭のへに月傾きて木影横たふ

戸を出でて暫しがほどをうち歩む何か穂萱の目にわづらはし

道のべに立てる萱の穂ひとしきり動くと見
えぬはた靜まりぬ

山べには鳥むらがりて啼く聲すむかうの梢
こちの木がくれ

みんなみの濱北の濱こもごもに潮とよむな
り明日も日和か

風早崎燈臺にて

目にとめて安房はるかなる燈臺のありか知
られつ夕となれば

人より栗を送られしに

置火もてただに燒き食む栗の實の甘さは何と故里のもの

其二

さす竹の君が賜ひし栗の實をむきつつもとな國おもひ涌く

其三

故里の和田峠路を越えゆきて君が里べに栗拾はましを

其四

君が家は片山つづき朝ごとにほたりほたりと栗落つる音

其五

夜はいまたしらしら明けの小林に入りて拾
はく落栗の實を

其六

小林の下べに來ればさはにある落栗の實を
籠もて拾ふ

其七

一度さへ拾ひしあとにまた拾ふ栗の實いく
ら袂重たし

其八

ねむごろに拾ひし栗を君食はず國遠く住む
友にわかつも

山かげほ今枯れ色のうつくしさ草根に殘る
いささ紅

冬の日は砂地の上にあたたかし蔓荊(はまばひ)の實の
しきてこぼるる

風しげく椿の藪を吹き搖する葉がくれの花
葉おもての花

偶作

魂あへる一目の逢(あひ)は百年のうき共住みにな
ほまさるべし

島山に降りし白雪いく時を保つとすらむ見
つつ乏しも

庭土の上に落ちつつたまりたる椿の花のく
れなゐ褪せぬ

冬空の曇りは高しきはやかに雪をいただけ
る伊豆の國山

たむの實をはぢく小鳥の音ならしわが軒屋
根の上にあたりて

ただ一つ見えて悲しき朝船は野増の磯に寄らで過ぎゆく

ひとしきり耳にまぢかしとどとどと磯波よする音なだれたり

春ははや木の芽ゆるむにさきだちて榛の木の花青みたるらし

渚原ひととき波のしづまれば遠き渚の波音きこゆ

春の夜の月はすがしく照りにけり木の芽ひらきてやや影に立つ

島山の裾ひくところ幾重にも榛若葉せり見るに床しさ

すでにして春來るらしさわやかに山の目白のさへづる聞けば

鶯は始めて啼けりほうほけきよほうほけきよとぞ二聲啼きし

ゆくりなくわれ來にけらし山の上の道なだらにて椿落ちぬる

晝の間は若葉に障へし山櫻ゆふべ目に立つは寂しかりけり

をさな杉伸びしを見ればこの島にすみ遊ぶ身の久しくなりぬ

うつせみに逢見し子らや眞間の野に立つかぎろひのあとかたもなき

島山を見ればいつくし立ち別れふたたびと
來むわれならなくに

去なむ日は近づきにけり獨りゐてもの思ふ
にぞ泪さしぐむ

耳につくうつつの聲は朝雉子(あさきぎす)とてもかくても立ち別れなむ

偶作

かりそめに面合すだに人の子のうら哀しさは思ひ沁むもの

卷末に

明治四十五年五月、久保田先生の選を經て、自分の歌が初めてアララギに載つてから、殆んど十年になる。この度自選歌集「青杉」を編むに就て、今までの作全部に目をとほしたが、初期の作には、採れるべきものが極めて少ない、そこで大正五年九月以前の作は全部棄てて、それ以後のものから選出することにした。然し最近の作になると、どうしても取捨選擇に迷ひが生ずる。依て大正十年四月以來のものは次回の歌集に收めることとして、この度は手をつけずに置いた。

それ故「青杉」一卷は大正五年秋から大正十年春まで、自分の年齢を云へば二十二才から二十七才まで、この間の作から成り立つてゐる。そして作の內容は、殆どすべてが伊豆大島の自然である。右の年間自分は大島に居住してゐたからで

ある。（大正五年秋といへば渡島後すでに滿一年を經てゐる）この集はもと〳〵大島の作だけを集めるつもりではなかつたが取捨選擇の結果、自然にさうなつてしまつた。歌は果敢なく力弱きものばかりであるが、自分にとつては一首々々皆なつかしい思ひ出の種である。

歌の數はすべて二百五十八首、制作の年次に從つて配列した。裝幀及び口繪は平福百穗畫伯にお願ひした。自分はこの數年來畫伯の御恩情を受けたことが實に多いが歌集發行にあたり裝幀まで心配していたゞくといふことは感が深い。なほこの歌集については久保田先生及び藤澤古實君から種々御配慮を受けた。古今書院主人は自分が少年時代の師である。その人が出版の勞を取つて下さるといふのも因緣が深い。忝い心でこの集を編み終へた。大正十一年一月耕平記

大正十一年三月七日印刷
大正十一年三月十日發行

青杉奥附
定價壹圓八拾錢

著者　土田耕平

版權所有

發行者　東京市外西大久保四五九番地　橋本福松

印刷者　東京市麹町區麹町二丁目九番地　小鹽眞造

東京小鹽印刷所印行

發行所　東京市外西大久保四百五拾九番地　古今書院
振替東京三五三四〇番

賣捌所　東京市神田區錦町一の一二　自彊館書店

T.
B
MA

T. KUNII-SHOTEN
BUCHHANDLUNG
MARUTAMACHI-KYOTO